

第 63 話 スタジオ夜話 (番外編)

サウンドドラマの制作

ミキシングへの具体的アプローチ (II)

☆ はじめに

いよいよ梅雨の季節になりました。しばらくは鬱陶しい日々が続きます。食中毒や健康には注意して過ごしましょう。読者皆様の健康をお祈りいたします。

さて今回はサウンドドラマ制作ミキシングへの具体的アプローチその第一回のお話で、今回はその二回目です。台詞が書かれた台本とミキシング計画との兼ね合いと演出などより具体的にお話ししたいと思います。スタジオ夜話番外編サウンドドラマ制作が目指す制作技法のお話しです。お付き合いよろしくお祈りいたします。

☆ 前回のおさらい!

作品音リスト、演出プラン図

前回作品創りに必要なシュチエーションごとの音リスト制作、演出家の思い描くシーンでの音の在り方を図にしたプランについて資料と共にお話ししました。ここではさらに具体的に説明します。

前回紹介した音リスト (参考リスト 1) と参考図 1 をご覧ください。効果音担当者は台本に基づきすでにロケハン (ロケーション・ハンティング、映画やテレビなどの制作時に、ロケ地、スタジオ以外の撮影場所を探すことを言います。略称は「ロケハン」) と簡単な音についてはロケハン時に収録を済ましています。このリストでのポイントは踏切の警報音です。警報音のテンポとピッチ (音程) が音楽担当者に伝わることによってここで使われる音楽の制作時にそのテンポやピッチの参考になるからです。また演出プランでは前回の参考図に、かなり OFF で京王線電車の警笛とあります。効果音担当者は次の音リストには警笛のピッチが記入され音楽担当者はその音も参考にする可能性もできます。脚本家は主人公

モノログ中で音楽 IN と指定していますが、場合によってはシュチエーション設定の最初に背景音京王線警笛の中で音楽 IN と変更するかもしれません。さらに京王線が通過して遮断器が上がると主人公の脇をベルを鳴らした自転車がかすめす台詞はその音に反応したものになっています。音楽担当者はその部分にアクセントとして装飾音符的に自転車のベル音を予定して作曲する可能性もできました。効果音担当者は自転車ベルのテンポやピッチを音楽担当者から指定され創ることになることもあります。演出は電車の警笛から自転車のベル音までその経過時間を考慮しながら演出しなければなりません。タイミングを合わせるため主人公の台詞変更、アドリブが必要な場合もあります。各スタッフ間のコミュニケーションを取りながらより良い作品創りをするためには最低このくらいの手間暇が必要だと筆者は考えています。

☆ 台本のスタイルも考える。

台詞台本と演出台本を用意する。

サウンドドラマ制作では通常の役者さんが使用する台本と演出や効果担当者が使う台本とは別のものを用意するのが作業の効率化を助けます。台詞用の台本は今まで通りのスタイルが役者さんも慣れているので良しとします。ここでチョット話がそれますが最近 (かなり前からですが) 声優さんは台詞を必ずしも事前に読み込んできてはいないことが映画やテレビと比較すると多いような気がします。確かに収録時の姿形は音だけの世界で関係ないかもしれませんがまた台本を手を持ちながらマイクロフォンの前で演技するといったこともあります。そのため、台本はマイクロフォンと役者さん自身の間には持たない。マイクロフォンより若干高く、あるいは低く持ち目線だけで台詞を確認する。などとまことしやかに

役者さんのマイクロフォンワーク、テクニックとして罷り通っているのが現状です。姿かたちは見えぬけどマイクロフォンの前でアクションを伴い、より良い表現をすることが役者 (声優) さんの仕事だと筆者は確信しています。台本の話に戻ります役者さん用の従来通りの台本でも若干の改良は必要です。少なくともマイクロフォンワークやアクションなどのメモスペースは確保するようにします。昔の「ト書き」の補助になるメモなどのスペースの確保です工夫してください。さて演出用の (スタッフ用) の台本ですがこの台本には各スタッフが共通に必要な情報がすべて記載されていることが重要です。前で説明した演出プランの参考図は最低限記載されているものであること、また各スタッフが必要とするメモなどの記載スペースのあるものを用意します。スタッフは制作時に台本を置くスペースを確保できるので筆者は B4 以上の大きさの演出用台本を作っています。写真 1 参考、この演出台本は非常に便利でお互いがメモを入れたものを見せ合うことで制作時のお互いの思いや作業過程などが一目でわかり理解を深めます。参考写真の演出用台本は音のイメージを音楽と効果音に託してベースになる音楽に台詞や効果音の定位を指定しています。この演出用の台本は第一稿でさらにスタッフメモも加わって完成稿になります。役者さん用の台本には上部にメモスペースを用意してあり、きっかけなどになる効果音は事前に記入してあります。

☆ 台詞収録時のスタジオ

収録環境の創りかた

今回は技術的側面の一部についてお話しをします。特に役者さん用のモニターについてのお話しです。

最近は多くの制作現場で音楽や効果音な

スタジオ夜話

作品創りに必要な音リスト・参考図

最初のリストなどの書式は各担当ごとにバラバラでも問題なし後日共通の書式に統一してください。

効果担当者の作ったリストの一例です。

参考リスト 1

元になる台本上の記載例

閑静な住宅地・世田谷区
京王線の踏切で電車の通過を待つ主人公

M 主人公「さすがに今日は疲れた・・・」

M 主人公モノログの中で「N」

モノログ



7 ページ 冒頭	閑静な住宅地 世田谷
住宅地 背景音	特徴的な音が無い サラウンドノイズ ロケ
京王線 踏切	警報音 ロケ 若干OFF音 J=80 F#
京王線通過	通過音 ロケ OFF音～ ステレオ収録
京王線通過	OFF音で警笛 違う場所で別録りモノラル A#

基本 4つぐらいの音で組み合わせて創ります。
警報器の音はあまり近くなく、モノログを邪魔しない感じ

音楽担当者様用にtempoとピッチは確認済(京王電鉄)
若干の変更は微妙なら変更可能?

台本上のモノログ、音楽 時間軸上の位置確認の必要アリ
効果音のタイミングあわせませす。

参考図 1

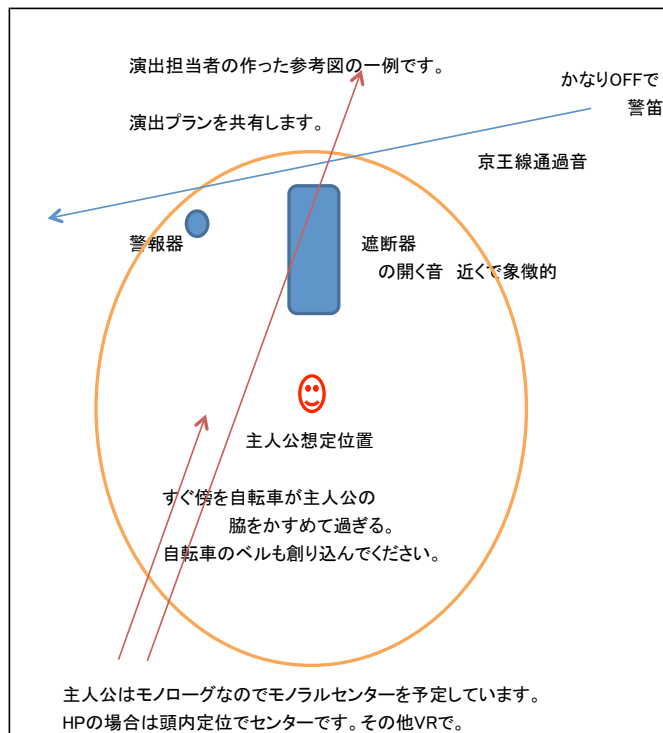
元になる台本上の記載例

京王線通過して遮断機が上がる
主人公「あぶないな！」おどろいて

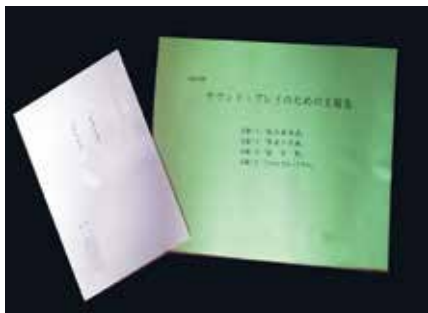
主人公「しかし今日の電話はいいな
なんだったのさ？普通なら彼はあの時間に電話は・・・」

自転車通過

すぐ傍を自転車が主人公の
脇をかすめて過ぎる。
自転車のベルも創り込んでください。



資料写真

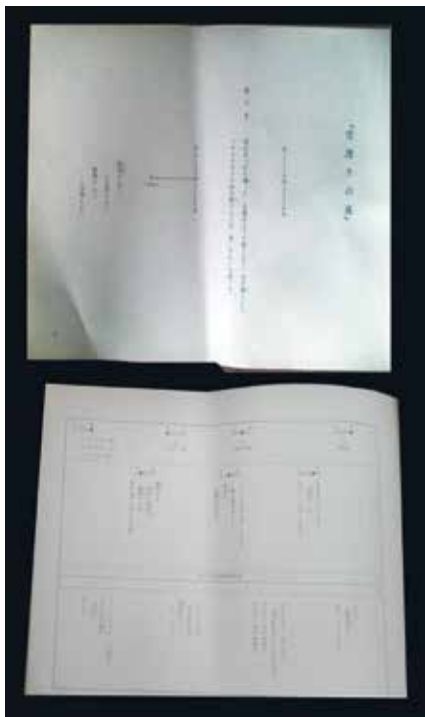


↑大きい台本が演出用台本です。サイズは A4 の倍です。左側が通常の台本の大きさです。サイズは A4 です。

↓役者さん用、普通の台本サイズです。



普通サイズの台本ですがページ上部にスペースを取り必要な「ト書き」以上の情報を提供する。また台詞の行間を多少広めにとり、音楽や効果音の指定以外のメモなどを書き込めることができるようにしている。



上の写真の演出用台本を開くと左のようなページになっています。写真は片側だけですが見開きだとかなり広く様々なメモや図が書き込めます。下の写真はメモやプラン書き込み前のオリジナル第一稿です。

◀音のイメージを記載して台詞との関係を表現した演出用台本の一例
素材の定位位置や台詞との関係が表現されている。さらに各スタッフのメモなどが加わる。

ど無し、場合によっては台詞相手のいないオンリー録り？などが見られます。筆者には作品創りではない商品作りの見えるのですが経済面を考えるとそれもあるのかもしれません。それはともかくとして台詞収録現場では音や音楽がきっかけとして台詞などが進行することがよくあります。そうしたことを前提にして筆者は出演者用のモニタリングを用意しています。今もあるのかもしれませんがかつては便利な音声調整卓もありました。国産 H 社製で NHK で使用されていました。マイクロフォンのフェーダーを上げるとマイクロスイッチが動作してスタジオ側（ブース側）のモニター回路が OFF になるという便利ものです。これならばモニター音は絶対にマイクロフォンには入ることはありません。演出上は役者さんとともに音に重なってといった部分では経験等が大切な要素となりますがエン

ジニアのテクニックと演出、役者さんの絶妙なワークによってきっかけ音による台詞収録もなんとかこなしていました。音楽のテンポの流れに乗ってという場合はこれはヘッドフォンモニターを利用するほかありません。しかしこのヘッドフォンモニターにも工夫は必要です。筆者は動きのある台詞収録を前提としてワイヤレスのヘッドフォンを必要な数だけ用意することにしていました。もちろん音漏れを考えてなるべく小音量で使用します。また事前に音楽などを CD などで用意して役者さんには十分に聴き込んでもらうことも重要です。できれば台詞収録時に音楽などは完成して DAW に仕込み台詞トラックを用意そこに収録するようにできれば良いと思います。きっかけの音などは割と目立つ音が想定されるので演出のキューで代用できれば問題ありません。驚くことに音楽などにある程

度親しんでいる役者さんと仕事した時役者さんは正確なタクトで台詞を喋り、そのなかの間も音楽の入りを聴いただけでこなしてしまいました。宝塚出身の女優 K さんは流石本物でした。スタジオ内のモニタリング環境は重要です。それは単に音を流すということにとどまらず、演出者のキューや音楽担当者がスタジオ内でタクトを振ることなども考慮することを意味しています。

☆次回は

今回はサウンドドラマ制作ミキシングへの具体的アプローチその脇でした。今回のお話は前回のお話ををより詳しく分かり易くしたつもりです。次回はさらに詳しく制作上のお話を進めて行きます。

— 森田 雅行 —